

ゴブリンの手紙

素人目

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある男が言った。「ゴブリンどもは皆殺しだ」
それを聞いた者が言った。「まで、早まるな」

四方世界に、良いゴブリンを投入しました。
にわかです。もしおかしな点があっても、あしからず。
なお、不定期更新です。

目次

ゴブリンの手紙

1

本編

早朝・辺境の村にて

4

ゴブリンの手紙

背が低く、耳が尖っている者。すなわち、あなた達がゴブリンと呼ぶ者らの一部の民から、肌が白く、頭の毛が豊かな者。またはその者らと寝食を共にする全ての知性ある者へ。

あなた達に、我らのことを知らせるために、この手紙を送る。真に、これに書き記されているものは真実であり、我らに属する全ての者について述べた物である。

さて、まずは我らのことについて、少し書き記さなくてはならない。我らはハウボウの民である。ハウボウとは、放浪した者の意である。我らは月が1つの地で生まれ、天の御業と地の慈愛によって、この地に送られてきた。

我らが生まれた地には、ラウデイがいた。彼らは力が強く、戦いに長けていた。また、非常に数が多く、時には鉄の刃と鉄の衣で身を固めていた。

そして彼らは、我らに攻めかかってきた。我らは同胞と受け継がれた地を守るためラウデイと戦い、彼らを追い返した。

しかし、戦いで多くの同胞が倒れたので、女子供の嘆きが三日三晩響き渡った。多くの戦士も涙を流した。

我らは、自分達の住処や、その他のあらゆる受け継ぎの地の防備を固めるため、数々の砦を築いた。

また戦争の武器、すなわち、鋭い鏃の矢と矢筒、あらゆる刃と毒、身を守る厚い衣と兜を造り、更に戦争のために全ての準備を整えた。

一部の同胞は、我らとラウデイの間に和平の誓いを結ばせようと、熱心に努めていた。

しかし、その働きは無益に終わった。ラウデイが皆強情なわけでは

無かったが、ほとんどのラウデイは憎悪を凝り固めていた。また、同胞が殺されたことにより、我らの中にはラウデイを憎む者が大勢いた。

そしてついに、ラウデイの長が戦士を引き連れ、我らに迫ってきた。ラウデイの数は非常に多く、数えることが出来なかった。

ラウデイから逃げることは出来なかった。背後には氷を纏った高い山が連なっており、行く手を阻んでいるからである。

我らはラウデイと戦うため、得られる限りの力を使おうと、全ての同胞を集めた。男も女も子供も、武器で身を固め、戦いのいでたちで集まった。

我らは数ある砦を使い、ラウデイと大いに戦ったが、砦は次々と落とされた。我らは度々殺された同胞のために泣き叫び、悲しんだ。泣き叫び、悲しむ声は声は非常に大きく、その声は隣の砦に届くほどであった。

そこで我らは、これ以上に同胞の血が流れないように、天と地に対して祈った。

その願いは、地の慈悲によって聞き届けられ、天の御業によって成就した。天は、我らをラウデイの見当たらない地へ送らせた。

我らがハウボウの民、すなわち放浪した者と名乗ったのは、このためである。

さて、これらを事を知った知性のある者は、この地に元々いたゴブリンと呼ばれる存在と我らが、全く異なる存在であることが分かるであらう。

彼らは、ラウデイより邪悪な存在である。我らと姿が似ており、言葉も通じるが、彼らは野蛮で残忍で流血を好み、汚れに満ちている。また、我らを攻撃し、物や食料を奪おうとしてくる。

そこで我らは、彼らを強盗と呼んでいる。強盗の存在により、我ら

はこの地でも堀と土手を築き、杭で柵を造り、罾を張り巡らせて、守りを固めなくてはいけなくなった。

肌が白く、頭の毛が豊かな者。またはその者らと寝食を共にする全ての知性ある者よ、どうか我らと強盗を区別し、我らと戦わないでほしい。そして、あなた達の同胞に、この手紙にあることを正しく伝えてもらいたい。

我らが戦うのは、ラウデイと強盗で十分である。我らはもう、嘆きの声は聞きたくない。

我らは、青と緑の布を首元に巻いている。そして、もしあなた達の前に現れるならば、ハウボウと名乗ろう。

我らに使いを出すならば、あなた達が森人の山砦と呼ぶ、打ち捨てられた砦跡に來ると良い。そこで同胞の戦士と会えるだろう。

我らハウボウの民と、これを読む全ての者の平和を願ひ、この手紙を結ぶ。

代筆 鋼鉄等級冒険者

本編

早朝・辺境の村にて

目覚めは、カンカンと聞き慣れない音でもたらされた。
古ぼけた机から身を起こし、今の状況を考える。

「……………ああ、寝落ちか」

この体は、かなり疲れが溜まっていたらしい。休憩のつもりだったが、一晩寝過ぎしてしまった。雨戸の隙間から、日の光が差し込んでいる。窓を開ければ、すぐに早朝の冷気が部屋を満たした。

風邪を引かなくて良かった。今日のサイコロの出目は良いらしい。背中を伸ばし、凝り固まった筋を伸ばす。

ゴリツと嫌な音が聞こえた。どこが鳴ったのかは考えたくない。俺も歳だというのか。まだまだ元気なつもりだったのだが。

「動かしでも……………大丈夫か。って、水がめが空じゃないか。おいっ、朝の水汲み担当は……………今は居なかったな」

顔を洗いたかったが仕方ない。水桶を肩に担ぎ、村の中心にある井戸に向かう。腰が壊れなくて良かった。

ゴブリンに娘が拐われてから、もう7日だ。帰ってくる兆しはない。

奴らの巢窟へと何人か鋼鉄等級の冒険者が向ったが、村を出発して以降、何の音沙汰もない。制圧に失敗したのだろう。だというのに、1日は変わらず巡っている。

朝の水汲みを俺がするようになった。拾える薪の量が減った。後は妻の生活習慣が少し狂った。それぐらいだ。

ほとんど代わり映えしない日常では、これらの変化は大きなものだ。だが、せいぜいその程度だ。日常という範疇に収まってしまっている。

この程度なのか。娘一人失って、たったこれしか変わらないのか？
こんなものでは、あつという間に慣れてしまいそうだ。

……だめだ。いま考えても仕方ない。

井戸の傍らで上着を脱ぎ、頭から水をかぶる。井戸水は痛いほど冷たく、思わず息を呑む。全身の皮が縮んだようだ。

そして少し後悔する。体を拭く物がない。乾いた布といえば、さつき脱ぎ捨てた上着しかない。寒い。

「何やってんだ炭焼き。そらっ」

「つと、ああ、猟師か」

振り返れば、猟師が手ぬぐいを投げつけて来た。弓と矢筒を背負っているのを見るに、これから山に入るのだろうか？

「助かる。このままじゃ凍えるところだった」

「気をつけろよ。しばらくは元気でいて貰わなきゃ困る」

「あ？どういふことだ」

カンカン、と、山から音がしてくる。

鐘の音ではない。この村に鐘はない。

それは不規則なようで規則的なリズムを刻み、よく乾いた硬い木材同士か、あるいは金属同士を叩き合わせているような音だった。

「……………この音だ。お前は昨日何してた？」

「ずっと窯にへばりついてたな」

「なら知らないか。山奥で昨日から鳴ってるんだ。それも複数の方向からカンカンとね。うちの犬が興奮しっぱなしだったよ」

「自然の音、じゃないよな？」

「たまにだが笛の音も聞こえた。明らかに誰かが鳴らしている」

音が聞こえてきた方向に村はない。冒険者ならば村に降りてくれればいい。

「……………ゴブリンか？」

「さあ？ゴブリンが笛を吹くなんて聞いたことがない。もしもゴブリンだったら、よっぽど頭が良い個体だろうね」

ゴブリンの存在を思い出せば、自然と手が拳を握る。怒りがふつふつと湧き上がる。

娘が連れ去られる光景は、しっかりと脳裏に焼き付いている。

家の裏山で目を離れた隙に、投石で娘が気絶させられていたこと。娘の首筋にナイフを当てられ、下手に動けなかったこと。群れでゲラゲラと笑いながら、娘を引きずって立ち去るあの姿！

「……………ゴブリンか盗賊の類か。正体は分からないが、敵だと思っっている。友好的な存在だったら、村に降りて話かけるだけでいいからね」

猟師は皮袋を手に取り、井戸水を詰めた。ふくらんだ皮袋を腰に結え、ついでに小物を整理する。

「この村では、お前が1番力が強い。俺は山に入って状況を見てくる。村になにかあったら頼む」

「……………娘一人すら、助けに行けない男にか？」

「なら守れよ。お前が強いことに変わりはない。後は妻と小さい息子だったか？もう家族を失いたくないだろ？」

……妻の体調は、あまりよくない。娘を拐われたショックと不安から夜遅くまで眠れず、昼前にベットから起きてくる。息子の前では何とか笑っているが、いつまで持つか分からない。息子も何かを悟ったのか、ここ数日は口数が少ない。

もしも息子までいなくなったら？あるいは妻が拐われたら？

「ひとまずゴブリンは、斧で叩き割ってやる」

「その意気だ……ん？」

犬が激しく吠え立てるのが聞こえた。かなり興奮しているのか、一向になきやまない。

これには聞き覚えがある。猟師の犬だ。

「来たか。炭焼き、戸を叩いて村長を起こしてくれ」

「わかった。ついでに斧を取ってくる」

急いで上着を着て走り出す。その勢いのまま戸を叩き、声を張る。

「村長っ、起きてくれ！」



村長に事情を説明したあと、すぐに家に向かった。

何事もない様子に安心するのも束の間、寝ている妻を起こして、壁に立て掛けてある斧を持つ。

「なにかが村に来たようだ。恐らく良い相手じゃない。俺は村外れに行く。猟師の家の方だ。息子を頼む」

「……………っ！大丈夫なの!？」

「何とかする。戸締まりをしつかりしとけ。くれぐれも拐われるなよ！」

それだけ伝えると、すぐに家を出る。

村外れにつけば、すでに村の男共が集まっているのが見えた。ピツチフオークや斧、鉋を手に取っている。

「遅くなった。豚飼い、状況はどうなっている？」

「炭焼きか。それがわからねえんだ」

「は?」

「何かいるのは違えねえんだが、姿が見えねえ。ただカンカン鳴っているだけ」

「ゴブリンだ！キャベツ畑の方にいるぞ！」

その声が響くやいなや、皆の目が一齐にキャベツ畑に向く。

それを見たとき、まずは困惑した。

畑と雑木林の合間を歩く群れを、何かと見間違えたのかと思った。

どこかまとまりを感じる動きに、鉄帽を被り、布と毛皮を全身に纏った姿を見て、圃人の集団が迷い込んだのかと思った。

だが、鉄帽の鏢の下から覗かせる顔は、間違いなくゴブリンで、何匹かで肩に担いでいるのは、どう見ても人だった。

「人質かっ！」

「炭焼きの娘と同じだ」

「俺が弓で仕留める。この距離なら外さない。脅迫する暇なんて与えない」

「頼む。俺は回り込んで襲う」

「よし、炭焼きに続くぞー！」

ブンツと矢を放つ音が聞こえた。斧を握りしめ、奴らの元へと駆け出す。

だが、ゴ布林共を血祭りに上げることは出来なかった。

猟師の弓は、確かにゴブリンの胸に命中した。しかし、そのゴ布林はうずくまりはしたが、倒れなかった。胸に何か仕込んでいたらしい。

問題はその後のことだった。

奴らは驚くほど素早く動き、木々を盾にした。猟師の弓の射線を切ったのだ。

更にその直後、カンカンとあの音が響くやいなや、森のあちこちから矢が飛んでくる。

「矢だっ！」

「いぎつ、痛つてえー！」

「隠れろ！的にされるぞっ！」

その声を聞いた各々が、急いで家や荷車の影に隠れる。

矢の雨はすぐに止んだ。恐る恐る顔を出せば、ゴ布林は一匹残らず消えていた。

まんまと逃げられた。

「……………豚飼い、大丈夫か？」

「痛え……………腕が」

見れば、二の腕に矢が突き刺さっている。

傷口あたりの布を裂いてみれば、あまり深くは刺さっていないよう

だ。

所詮はゴ布林だ。弓を引く力は貧弱らしい。

「矢は浅いところで止まっている。良かったな豚飼い。お前の筋肉が矢を止めたぞ」

「ハッ……言ってくれ」

「村長から解毒剤をもらえ。毒が塗られれたら事だ」

応急処置は他の人に頼み、自分は猟師の方へ向かう。

猟師はゴ布林が去ったというのに、弓を片手に油断なく辺りを見回していた。

「猟師、いい弓の腕前だな」

「皮肉はよしてくれ。人質が肩に担がれていた以上、胴を狙うしかなかった」

「皮肉じゃない。防がれたのはともかく、矢は吸い込まれるように当たっただろう。防がれたのだって、しっかりと胸の中心にある板か何かを捉えたと言うことだしな」

実際、あの場で当てられる人間は多くないだろう。人質に当てないように、動いているゴ布林の体の中心に当てるのだ。称賛に値する腕前だ。

いや、まずはそれより聞くことがある。

「猟師、人質の顔は見えただか？」

「……ああ。いつぞやの冒険者だった。酷い顔だったが、死体じゃないと思う」

「そうか……」

「炭焼き、もう時間が経ち過ぎている。お前の娘が生きているかすら」
「わかっている。だが夢を見させてくれ」

ゴブリンは女を捕まえると、繁殖のためにはらみ袋にする。無事ではないだろう。だが、まだ生きている可能性がある。

「まずは村の皆で話し合おうんだ。奴らは村の手に負えない。冒険者を雇うのもタダじゃない」

「……………そうだな」

山から、カンカンと音が聞こえる。その後、かすかに笛のような音も聞こえた。

首を洗って待っている。

何時になるかは分からないが、絶対に皆殺しにしてやる。